

9月13日(日) ワークショップ第3室 (R204)

第二言語によるライティングについて
Ulla Connor の *Contrastive Rhetoric* に学ぶ
Ulla Connor's *Contrastive Rhetoric:*
Cross-cultural aspects of second-language writing

<異文化学習研究会企画>

発表者: 加藤忠明 (江戸川女子短期大学)
村松美映子 (福島県立医科大学)
西村厚子 (共立女子短期大学)

対照言語学は、L2 ライティングの比較文化的研究において重要な役割を果たしてきた。本発表においては、近年の対照修辞学研究を概括する Ulla Connor 博士の著作 *Contrastive Rhetoric* を基盤にして、異文化学習としての L2 ライティングを再検討したい。

第二言語習得における母語の干渉は応用言語学研究の中心課題であった。しかしそれらの研究の多くは文や発話レベルに限定され、言語や心理言語学的側面のみが探求されてきた。これに対し対照言語学では、談話とテキストのレベルまで扱われる。Connor 博士の著作では、母語の慣習、しきたりと談話、修辞構造と第二言語使用への影響、特にライティングに見られる言語干渉の認知と文化の側面に焦点が当てられている。対照言語学の領域が拡大するにつれ、第二言語学習・教育についての関心が、特に英作文や E S P の指導に関心を持つ人々の間で高まってきている。博士は、広範囲な学際的研究を元に L2 ライティングの対照的研究の歴史に遡り、対照修辞学と諸分野 (英作文研究、翻訳、テキスト言語学、類型分析、文化人類学) との共有領域を探求している。また、異言語・異文化の L2 ライティングへの影響を、様々な事例に基づいて、文、パラグラフ、テキストの各レベルで扱い、テキストの組み立て、結束、首尾一貫性、スキーマ構造などにおける言語の干渉を調べ、言語的・文化的な拘束が文章の性質・目的をいかに転移するか、という問題について論じている。

村松は、Connor 博士に直接会い、その interview を *JALT The Language Teacher 12:4* に掲載しているが、その interview において博士は、従来の contrastive rhetoric の定義を広げ、audience と composing process の両方を重要視すると述べている。また、博士は、対照修辞学研究の根底にある質量両面からの調査法を検討・評価し、応用言語学や L2 ライティング教育における対照修辞学の実践的応用例を示している。

本発表においては、対照修辞学と L2 ライティングに関する論題を以下のような構成で提示しながら討議を進めていきたい。

<第一部>歴史研究

- (1) 広がり行く対照修辞学: L2 ライティングにおける問題点と解決法、L2 ライティング研究と対照修辞学の出現、対照修辞学の包括的理論の構築について
- (2) 応用言語学における対照修辞学研究: 対照分析、誤答分析、中間言語分析、対照修辞学の展開を取り上げ、対照分析との関連性、各種国際英語、応用言

9月13日(日) ワークショップ第3室 (R204)

語学といった文脈での対照修辞学研究について、新しい方向性を示す。

- (3) 対照修辞学の歴史的発展：対照修辞学の起源や、各国語を対象とした具体的研究例を紹介しながら、Kaplan(1966)の研究から言語・ジャンル・作者の多様性へと向かう方向性について取り上げる。

<第二部>他の分野との共有領域

- (1) 修辞学と作文：大学教育における修辞学と作文教育の役割を始めとして、古典修辞学、表現主義者のアプローチ、認知的アプローチとしてのライティング、social constructivistの考え方について述べる。
- (2) 修辞学とテキスト言語学：テキスト言語学の歴史概観、定義、主要学派、概念、方法、ライティングへの適用、北欧英作文プロジェクト、テキスト言語学を重点に置いた対照修辞学研究について
- (3) 文化が埋め込まれたアクティビティとしてのライティング：文化の定義、文化と識字の心理学的調査、教育学的調査、及び応用言語学者による文化・識字研究について
- (4) 比較修辞学と翻訳研究：翻訳研究理論の展開、比較修辞学と翻訳理論の転移、共通の問題点としての翻訳における「重要度」と「適切さ」の理論について
- (5) 対照修辞学のジャンルを特定する研究：ジャンルの概念、学校での作文、学術論文、専門家の文章、社会認知的観点から見た論文の書きかたの習得について

<第三部>対照修辞学からの示唆

- (1) 対照修辞学調査法：作文教授法研究の手引き、対照修辞学調査法、及び今後の示唆について
- (2) 結論（今後の示唆と調査の方向）：対照テキスト研究からの示唆、書く過程に基づいた対照ライティングへの示唆、EFL状況下での特定ジャンル対照研究からの示唆、異文化状況設定の中でのEFL/ESLライティングのテスト・研究方向について

応用言語学における対照修辞学の方向性としては、1) contrastive text linguistics(様々な言語や文化の談話構造における論理の首尾一貫性についての比較分析)、2) 異文化圏の作文学習過程についての比較研究、3) 第二言語作文活動の比較(教室における振る舞いの文化的多様性)、4) 各ジャンル、目的、状況を視野に入れた対照修辞研究、5) 異文化・イデオロギー教育と対照修辞学(学習者が標準語文化に同一化して自文化に対する信頼や自信を失うという可能性への教師の認識について)の5点が挙げられる。

contrastive rhetoricを学び、教えることは、言語や文化によってライティング・スタイルが異なるということや読み手にも規範があるということをEFLの学生に理解させる上でも意義深い。国際化がますます進み、英語で書いて発表する機会が増える中で、対照修辞学は今後、研究と実用の両面で重要なものとなり、また、日本におけるEFLライティングの分野にも多くの示唆を与えてくれるであろう。